

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884026

研究課題名(和文)17-18世紀インドにおける海港都市の発展と広域社会秩序の変容

研究課題名(英文) Changing Society along with Developing Port Cities in India in the 17th-18th Century

研究代表者

和田 郁子 (Wada, Ikuko)

京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：80600717

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、17世紀後半から18世紀初頭にかけて、地域社会の変動に伴いインド南東部の港町で見られた変容の諸相を一次史料に基づき明らかにした。従来イギリスによる植民地化の前史として捉えられてきた港町マドラスの発展史を南インド地域の歴史のなかに位置づけるため、複数言語の史料に基づく実証研究が必要であった。その研究のための基礎作業として、イギリス東インド会社関連文書に加えて、オランダ語・ペルシア語文献の史料調査を行い、マドラスとの比較の対象として周辺の港町の状況について分析した。

研究成果の概要(英文)：This research explored changes observed in and around port towns on the Coromandel Coast in the later seventeenth and early eighteenth century. This work aimed to place the early history of Madras more in the context of local history of South India, as the process is usually considered to be the beginning of the English colonization of India and so has been examined mainly from the perspective of European expansion. For such a purpose it is necessary to examine multilingual primary sources including the records of both English and Dutch East India Companies and Persian manuscripts. Analyzing part of those materials shows us what changes the existing ports in the region experienced in those days, which provides appropriate examples to compare with the case of Madras.

研究分野：人文学

キーワード：港町 南アジア史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 都市としてのマドラスをめぐる歴史研究は、イギリス東インド会社の「植民都市」と、植民地支配下の「帝国都市」という2つの視角から進められてきた。とくに植民地時代とそれに直結する18世紀後半以降については関心が高く、植民地関係文書をはじめとする英語資料に基づいて膨大な研究が蓄積されてきた。その一方で、18世紀前半までの都市マドラスの形成期を実証的に分析した歴史学的研究はそれほど多くない。最近の研究の中では、会社時代のイギリス系「植民都市」に関して精力的に論考を公表しているP. スターンの成果などが注目されるが、概して初期のマドラスの歴史は近年漸く注目され始めた研究課題である。

(2) マドラスの歴史が、18世紀における他のヨーロッパ諸勢力との競争に勝ち抜き、やがてインドの植民地化に至ったイギリスの活動と分かち難く結びついていることは確かである。しかし、都市としてのマドラスの成長は、イギリスがインドにおける優位を確立するよりも前から始まっていた。実際に、イギリス東インド会社が進出するまで寒村であったこの地は、18世紀半ばまでには、その周辺にあって以前から交易港として知られていた他の町とも肩を並べられるような重要な港町としての地位を獲得しつつあったのであり、17世紀半ばから18世紀前半にかけての時期は、マドラスが都市へと発展していくための基礎を打ち立てたという点できわめて重要であると言える。

(3) マドラスに関する既存の研究は、上述した近年のものも含め、専ら英語史料に基づき、主としてイギリスによるインドの植民地化前史の文脈で行われてきた。しかし、マドラスの初期の発展は、イギリス東インド会社の活動によってのみ進んだのではなく、様々な出自の人々を内外から受け入れ、彼らの活動とその成果を取り込むことができたからでもある。これらの多様な人々の活動やその社会的・経済的・政治的影響を、従来研究が依拠してきた英語史料からのみ分析することは困難である。研究代表者は、近世南アジアにおける港町の歴史を、主にオランダ語史料に基づき研究してきたほか、この時代の南アジア史研究の基本史料であるペルシア語文献の訳注(共訳)にも取り組んでいる。これらの経験から、港町としてのマドラスの勃興を地域の歴史のなかに位置づけるために、ペルシア語史料やオランダ語未刊行文書のような史料群を、イギリス東インド会社関連文献をはじめとする英語史料と併せて用いることの有用性を確信するに至った。

## 2. 研究の目的

(1) 17世紀後半から18世紀初頭にかけて、ムガル帝国の南方遠征と、それに続くデカン以南の南インドにおける政治的枠組みが激変するなかで、マドラスが位置するコロマンデル海岸とその内陸後背地の社会秩序は大きく変容した。このことが、沿岸部の社会に対してどのような影響を与え、港町をめぐる権力構造や、交易をはじめとする人々の活動、近隣の港町との競合関係をどのように変えていくのかを実証的に分析する。

(2) 上記のような社会の変容を問うためには、必然的に、変化する以前の状況に関する知見を深め、変容と同時に継続性についても明らかにすることが求められる。何がどのように変わり、何が変わらないのかを具体的に示すために、本研究では、比較対象として、マドラスと同じくコロマンデル海岸に位置する他の港町を取り上げる。とくに、マドラス以前に同海岸有数の交易港として栄えていた他の港町をマドラスの場合と対比して分析の対象とすることによって、この地方の港町社会における継続性と変容を明らかにする。多言語史料の利用により、内外の諸地域との関係も視野に入れ、都市マドラスの発展史を、連関の視点から、地域および世界との結びつきのなかに位置づけることを目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究においてとくに必要とされる17世紀後半から18世紀初頭のマドラス、コロマンデル海岸およびその内陸後背地に関する史料について、主にイギリスとオランダの図書館・文書館等で調査した。マドラスに直接関わるイギリス東インド会社関係史料についてはBritish Library、オランダ語未刊行文書についてはハーグのNationaal Archiefでの調査が不可欠である。イギリスにおいては、併せてペルシア語史料の調査も行った。必要なデータについては、British Libraryにおいては主に文書をスキャンした画像データの作成を依頼し、Nationaal Archiefにおいてはデジタルカメラで撮影した画像データとして収集した。

(2) インド近世史の分野において、ペルシア語、オランダ語文献などを含む多言語史料を併用した実証的な研究の成果は、世界的にもまだ極めて少ないが、近年オランダのライデン大学では、オランダ語史料を利用できる若手研究者の育成を企図したプロジェクトが進められている。本研究もこのプロジェクトの関係者と緊密に連携をとり、オランダにおいて関連分野の研究者との意見交換や研究協力に向けた協議を行った。

## 4. 研究成果

(1) 初期のマドラス、その近隣の港町、コロマンデル海岸地域全般に関係する一次史

料についての調査を行った。イギリスでは、British Libraryにおいて、17世紀後半以降のイギリス東インド会社によるマドラスとの通信に関する文書を中心にデータの収集を行った。マドラス発の文書としては、とくに1650年代から70年代の時期の書簡を重点的に調査した。コロマンデル海岸の他のイギリス東インド会社商館から発信された文書のうち、主に北部の港町マスリパトナムに関するデータを収集した。また、17世紀末から18世紀初頭にかけてのロンドン発マドラス商館宛ての文書について調査し、刊行史料の不足を補う史料の選定をある程度行うことができた。ただし、一部の文書に関しては調査当時閲覧が制限されていたため、調査期間中に確認することができなかったものもあった。これらの史料の内容の確認については、今後の課題として残されている。なお、この時期の現地の政治権力者がイギリス東インド会社に対して与えた勅書等の文書に関しては現物がほとんど残っていないが、今回の調査によってペルシア語版の写しをいくつか確認することができた。

オランダでは、Nationaal Archief所蔵の17世紀後半のオランダ東インド会社関連史料のうち、主にインド東南岸の諸港に関係するKamer Zeeland宛ての文書について調査収集した。

また、19世紀後半の出版物を含む日本国内に所蔵のない希少な刊行史料についても、これらの機会に併せてBritish Library, SOAS Library (University of London)、ライデン大学図書館、Koninklijke Bibliotheek (ハーグ市)などの各図書館において調査し、必要なデータを複写やスキャンデータなどのかたちで収集した。

(2) 2014年11月に、オランダに出張し、フローニンゲン大学のセミナーで、コロマンデル海岸の複数の港町における各国東インド会社と現地社会との関係を市壁の建設とその機能に注目して比較検討する視点から研究報告を行った。また、上記のライデン大学のプロジェクトに関係するセミナーに参加して、ここに集った各国の研究者たちとの意見交換ならびに今後の研究協力に向けた打ち合わせを行う機会を得た。

また、2016年3月には、インドで開催されたワークショップに参加して、海上・陸上の交易のハブとしてのコロマンデル海岸の港町の役割に関する研究報告を行うとともに、南アジア内陸部の交通や交易に詳しいインド国内の研究者たちと意見交換・研究交流を行った。

(3) 本研究の成果のひとつとして、マドラスと同様にコロマンデル海岸に位置する港町・ナーガパッティナムに関する論考を発表した。17世紀後半にオランダ東インド会社が進出し、その後同社のコロマンデル海岸にお

ける主要な活動拠点となったナーガパッティナムは、イギリス東インド会社の活動と関係の深いマドラスの発展の過程を考察するうえで、比較の観点からとくに重要なところである。この小論においては、市壁が建設され存在し続けることがオランダ語の史料に示される「町」の区域の認識に影響を与えていたことについて明らかにした。この成果をふまえて南アジアの地域史のなかにマドラスの発展を位置づける視点からナーガパッティナムおよびプリカットの事例とマドラスの場合とを比較分析した論文についても発表する予定である。

このほかに、近世南アジアの複数の港町に見られた西欧系居留民社会における女性たちの存在に注目した論文を発表した。さらに、16 - 17世紀の南アジアにおける女性と集団の捉え方に関する論文と、17 - 18世紀の南アジア(とくにコロマンデル海岸)と日本との間の交易を介したつながりについて取り上げた論文を含む2冊の共著を刊行することができた。

(5) マドラスに限らず、近世南アジアの港町や沿岸部の歴史は、各研究において利用される言語ごとに特徴づけられる傾向があり、その結果としてイギリスやオランダ、フランスなどのヨーロッパ諸国の「植民都市」としての視点からそれぞれ別個に記述されることが多い。これに対し、多言語史料を利用することによって複数の港町を比較分析の対象とし、各地の事象の連関が明証できることが本研究を通して明らかとなり、多言語史料利用の有効性が改めて確認できた。今後の課題としては、南アジアの王朝側の史料をより積極的に利用することによって、内陸で生じた事象との連関の視角から、港町をはじめとする沿岸部の社会における変化をより包括的な広域の地域史の文脈で論ずることがある。

そのうえで、このような南アジアの地域史からさらに世界史へと視野を広げつつ、なお且つ実証的な研究を進めていくために、人間の移動や接触に注目した社会史的アプローチが不可欠である。さらに、この点においては女性の存在がきわめて重要であり、今後はジェンダーに注目した研究を深めていく必要がある。上述の論考でも扱った市壁の建設に代表されるようなハードな側面と、移住や接触をめぐるソフトな側面の双方からの考察は、港町が海港都市へと発展していく過程をさらに深く解明し、周辺地域の変動との関係から広い視野で分析するうえで欠かせないものである。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

真下裕之監修(二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注(4)」『紀要』神戸大学文学部、43、2016年、35-73頁(査読無)  
[http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/met\\_a\\_pub/G0000003kernel\\_81009428](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/met_a_pub/G0000003kernel_81009428)

和田郁子「ナーガパッティナムの2つの「町」 オランダ東インド会社関連史料を中心に」『西南アジア研究』No.83、2015年、55-66頁(査読有)

和田郁子「近世インド・港町の西欧系居留民社会における女性」水井万里子・杉浦未樹・伏見岳志・松井洋子(編)『世界史のなかの女性たち』(アジア遊学186)勉誠出版、2015年、179-194頁(査読無)

真下裕之監修(二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注(3)」『紀要』神戸大学文学部、42、2015年、113-151頁(査読無)  
[http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/met\\_a\\_pub/G0000003kernel\\_81008780](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/met_a_pub/G0000003kernel_81008780)

〔学会発表〕(計 6 件)

Ikuko WADA, “Early Modern Port Cities of South India as Hubs for Inland and Overseas Trade”, Kyoto University and Sikkim University Joint Workshop on Human Survivability, Sikkim University, Gangtok (India), 2016年3月21日。

和田郁子「近世インド・港町の『オランダ人』社会に生きた女性たち」第3回白眉シンポジウム「邂逅の作用反作用：歴史・芸術・フィールドの視角から」京都大学 芝蘭会館 山内ホール(京都市) 2016年1月25日。

和田郁子「前近代インドにみる「越境」の男女関係 接触が作り出す「境界」」共同研究班「前近代ユーラシアにおけるフロンティアとトランス・フロンティア」研究会、京都大学人文科学研究所(京都市) 2015年5月22日。

Ikuko WADA, “Embracing or Segregating?: Town Walls of the Early Modern Coromandel Ports.” Research Seminar, Department of History, University of Groningen, Groningen (The Netherlands), 2014年11月10日。

和田郁子「港町と市壁 近世コロマンデル海岸における事例から」東京外国語大学「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」共同利用・共同研究課題研究会、東京外国語大学本郷サテライト(東京都) 2014

年7月12日。

和田郁子「インドの村から長崎へ 綿織物から見る近世日本と世界のつながり」人文科学研究所・研究班「イスラムの東・中華の西 - 前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相」研究会、京都大学人文科学研究所(京都市) 2014年5月9日。

〔図書〕(計 2 件)

和田郁子 他、勉誠出版、女性から描く世界史 17~20世紀への新しいアプローチ、2016年、238-254頁

和田郁子 他、臨川書店、日蘭関係史をよみとく 下巻：運ばれる情報と物、2015年、173-204頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田郁子(WADA, Ikuko)

京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：80600717